

東北タイ・ドンデーン村： 開拓村（ウドンタニ県北モー村）訪問記

林 行 夫*

Don Daeng Village in Northeast Thailand : Notes on Emigrants Settled in Mo Nua Village, Udon Thani Province

Yukio HAYASHI*

This descriptive report records the oral history of pioneer settlers who emigrated from Don Daeng village to other pioneer villages in order to acquire good paddy land. The main data were gathered at Mo Nua village, Udon Thani province, which was established about 35 years ago by settlers from

Loei province and later occupied by many Thai-Lao settlers. Collected in intensive interviews during three brief visits in the period 1983-1985, these data throw light on the process of emigration, which was a distinctive lifestyle among Thai-Lao villagers in the 1940s and 1950s.

I は じ め に

この報告は、ドンデーン村出身者が移住した開拓村のひとつを訪問した際に得られた口述資料を整理したものである。¹⁾ 東北タイにおける農民の集団移住は、一般に「ハーナーディー (หาหนาคี)」とよばれる。字句どおりに訳せば、「よい田を求める」となる。ドンデーン村自体も、このような移住者によって成立したことが知られている。ハーナーディー全般については改めて論ずることとし、ここでは得られた口述資料を提示し、多少の考察をつけ加えるにとどめる。

訪問した村は、北モー村と称し、ウドンタニ

県の西南部に位置する。訪問は、1983年10月と1984年12月および1985年1月の3度にわたり、それぞれ数日間滞在した。われわれの知り得たドンデーン村からの移住は、コンケン

- 1) 「開拓村」にあたるタイラーオ方言はない。ここでは、記述・分析上の用語として使用する。なお、本報告で使用される資料は、基本的にはすべてインフォーマントの記憶をたどって再構成された個人史、村史である。開拓村としての成立を明確にするため、ドンデーン村出身者のみならず、当村の創設者、他村からの移住者とのインタビューを行なったが、ここにあげたものはその一部である。このような資料では、当然のことながらいくつかの矛盾があり、ある事実についての正確な年代の確定がきわめて困難である。しかし、多くの場合インフォーマントは自身におこったイベント（生年、結婚、子供の誕生、移動の年など）をタイ農村に広く浸透している干支で記憶しているので、これを中心に査定した。また、共有される同一の事実については、立場の異なる人々にインタビューすることで、情報をより確かにすることに留意した。

* 龍谷大学文学部; Faculty of Letters, Ryukoku University, Shichijo Ohmiya, Shimogyo-ku, Kyoto 600, Japan

郡の方向へ約80キロメートルゆき、道路沿いのコーコー村で南へ悪路をたどる。この悪路を約30キロメートルゆくと村につく。もうひとつのルートは、村の南東約25キロメートルの郡庁所在地シーブンルアング（当地の人々はタイラーオ方言でシーブンリアングとよぶ）を経るものである。北モー村との距離は25キロメートルにすぎないが、1日1便のミニバスで約2時間半もかかる。その悪路のため、片道10パーツの運賃は安く感じる。シーブンルアングは、村の人々にとって市場がある場所であり、コンケン方面とウドン方面を南北にむすぶ交通路の中継点である。

成立して35-37年（1984年調査時）になる北モー村には、まだ電気はない。村の戸数は、^{カムナン}区長でさえも「290戸近くになった」と正確な数字を口ごもるほど、増加の途にある。しかし、村内を横ぎる道は広く、屋敷地は十分に余裕があり、村空間としての奥行はドンデーン村とは比較にならないほどゆったりしている。開拓されつつある新しい村という印象が強い。

北モー村は、開村当初はわずか15戸の小村であった。村の創始者は、ルーイ県方面の出身を意味する「チュアサーイ・ルーイ（เชื้อสายเลย）」を自称する人々であったが、のちにハーナーディーで流入したコンケン、ローイエット県などからのタイラーオ族が多数を占めるようになった。先住者のチュアサーイ・ルーイに対して、彼らは自らを「タイ・タイ（ไทยใต้）」（南側からのタイ人）とよんでいる。移住者の数においても、ふたつの異なる言語集団が交錯したという点でも、北モー村は「開拓最前線」にある。

II-2 北モー村の成立経過

北モー村の初代村長をつとめたヨート・スックチャイ氏（1917年生まれ）は、現在の北モー村から南へ7キロメートル下った隣のヤ

ングロー区にあるヤングロー村で生まれた。ヤングロー村を1830年ごろに拓いた人々は、ルーイ県ワンサプンゲ郡の出身者や「コンムアングナムパート」³⁾とよばれる人々であり、中央タイ語ともタイラーオ語とも異なるルーイ方言を常用語とした。

ヨート氏は24歳のとき（1942年）、ヤングロー村からノイ村へ移る。ノイ村は、ヤングロー村出身者が拓いた6戸ばかりの村であった。今日の北モー村の前身となった村なので、旧モー村（バーンモーカオ）ともいわれている。ヨート氏は1948年にこの村の村長となった。さらに翌1949年、ノイ村の6世帯、ヤングロー村からの5世帯、およびクットサティアン村（現在の北モー村より南東10キロメートルに位置する）からの3世帯、そしてシーサケート県からの移住者1世帯を合わせた計15世帯が、ほぼ時を同じくして現在の北モー村の場所へ移った。理由は、ノイ村の屋敷地が狭く、通行路が悪かったためという。この15世帯が北モー村の礎となり、ヨート氏がつづけて村長をつとめた。ヨート氏はその後を語る。

「北モー村へ移って3年もたたぬうちに、コンケン、ローイエット県からの人々が移住しはじめた。土地を買うためのハーナーディーだった。わしらが開墾した水田をまず2、3人でみにやってきて、そのときに口約束で買いつける。そして、しばらくしてから金をもって家族と一緒にやってきたものだった。わしらは1ライあたりでは売らず、70-80ライほどの単位で売った。当初、多い者で100ライくらいだった。土地によって2,000から3,000パーツ、最高5,000パーツくらいで譲ったように覚えている。彼らの屋敷地については無料で、耕地以外

3) ルーイ県と県境を接したウタラディット県ナムパート郡の人々という意味と推察されるが、不詳。

から金をとることはなかった」。

北モー村開村以来の歴史をよく知るもうひとりの村人は、エート・セクスワン氏（1926年生まれ）である。エート氏と異なって、チャイヤプム県チャットラート郡バーンタン区のファサート村の出身者である。エート氏は、ハーナーディーにでた父親とともに、ヤンゲロー村のそばのドンクリエット村に移住した。1939年のことである。数年後、「レン・サオ」（「娘と遊ぶ」の意。若い男たちが配偶者を求めて同村内、近隣村の娘たちを訪れる慣行のこと）にでかけたノイ村で現在の妻と知り合い、1946年に結婚してノイ村へ婚入した。そして第1子を得た翌年に、家族全員で新たに北モー村へ移ったという。⁴⁾

「それから3年ほどしてから(1950年ごろ)、まず、コンケン県ナンポンゲ郡ブアヤイ区のタールア村から2、3人、ローイエット県からも四つ、五つのグループがわれわれの水田をみにやってきた。次いで、ドンデーン村の人々もやってきた。しかし、これらの人々を知るようになったのは、のちになって売買関係を通じてであった。……（自分がノイ村に移ったころ）チュアサーイ・ルーイの人々の両親は、すでに一帯をチャップチョンゲしており、よそ者から土地を買ったことはない。ヤンゲロー村の水田面積は少なく、村の人々は、少しずつの米をもってきてノイ村と北モー村の間を往復しながら、耕地と村を確保（チャップワイ）していた。でも、水田を大規模に開墾するということではなく、ほとんど森林のままでおかれ、チュアサーイ・ルーイの人々は狩猟を主にしていたようだった。……ハーナーディーでやってきた人々は、当時のエート村長やブン氏をたよっていた。もともとの住人である彼らは、自らつくった水田は売

らず、チャップチョンゲしておいた森林の外縁の土地を、やってきた人々に売っていた。移住者たちは当初、ナーコーク(陸田)としてこれを耕し、さらにあとからきたハーナーディーの人々に売って、ナークラング郡やチュムペー方面へさらに移っていったものだ」。

エート氏によると、北モー村に寺院が建立された1957年ごろには、もとの先住者よりも、他県から次々と移住した人々の数が上まわったという。ルーイ県出身のある先住者は、土地を移住者たちに徐々に売却したのちに、チュムペー郡フェイソー村方面へでている。すなわち、成立して10年もたたぬうちに北モー村は耕地を求める他県出身者によって膨張した。

II-3 ハーナーディーの移住者たち(1)

現在北モー村に住むドンデーン村出身者は26戸（1983年調査時）である。最初の人々は1950年前後に北モー村に移住している。最後の移住者グループが入村したのは1973年ごろである。また、1981年に水田だけを購入した者がいる。以下では、ドンデーン村からの最も初期の開拓者に焦点をあてる。彼らがドンデーン村をでたのは1940年前後のことであり、その時期は、ドンデーン村から多くの人々がハーナーディーのために他村へでた時期ともいわれている。

（チャンディー兄弟の北モー村への移住経過）

北モー村に移住した最初のドンデーン村出身者は、チャンディー兄弟たちである。彼らがハーナーディーのためにドンデーン村を離れたのは、早くとも1942年ごろである。そして、当初の目的地は北モー村ではなく、ナンポンゲ湖北に位置するコークパクンゲ村（ウドン県ノンサンゲ郡）であった(図)。

4) エート氏の記憶では北モー村の成立年は1947年であり、エート氏の言より2年早い。

チャンディー兄弟の両親は、ともにローイエット県出身で、ドンデーン村を開拓した世代に属する。両親はローイエット県から15日の道のりを歩いてドンデーン村に至り、耕地をチャップチョン⁵⁾したといわれる。そして、ドンデーン村で男子6、女子1の計7人の子供をもうけた。父親はその後、ドンデーン村で死亡している。長男から順に記しておこう。

- 1 チャンディー・シードンヤン⁶⁾ (以下同姓): [男]
- 2 サーリ: [男]
- 3 トン⁷⁾ミー: [男]
- 4 カイ (兄): [男]
- 5 カイ (弟): [男]
- 6 ファット: [女]
- 7 ブン⁸⁾ミー: [男] 生後すぐに死亡

ドンデーン村では、両親はトゥン⁹⁾グボーに水田を約30ライもっていた。収量は年間200-300ブン¹⁰⁾ (2,400-3,600キログラム)だったが、200ブン以上を消費した。豊作年には余剰米は売らず、自給用としてカチャー¹¹⁾ (カゴ)に入れて保管していた。チャンディー氏(1914年生まれ)は次のように1940年ごろのドンデーン村を回想する。

「他の豊かな村人は、余った米を隣市タープラの中国人に1ハーブ(約60キログラム)あたり25サタンで売り、その金で1着2-5サタンの服をタープラで買っていたものだ。両親の水田は洪水の被害をうけやすく、しかも塩がでる水田でもあった。米はいつも不足がちだった。これがハーナーディーに赴いた理由だ」。

チャンディー氏は、母親および兄弟6人とともにドンデーン村をでる。1942-1943年ごろである。一行には、牛車2台、牛4頭に加え、

5) 1ブン¹²⁾は約12キログラム。東北タイでは一般的な計量単位ムン(10斤; 12キログラム)と同義で使用されている。

ヤート¹³⁾親類でもあるノンヤープレーク村のチャン・セー¹⁴⁾グケーオ氏が含まれていた。そして、以下のコースでドンデーン村を北上する(名称は「村」名)。

第1日: ドンデーン→ドンハン→ノン¹⁵⁾グコイ→ノン¹⁶⁾グカイヌン(タープラ近く)→クットクワン¹⁷⁾→ノンサア¹⁸⁾ート [泊]

第2日: バンペット→トゥム→クットサイウ¹⁹⁾ォー [泊]

第3日: ヒンラート→フェイヤン²⁰⁾グ→コークスム→ボーノ²¹⁾ックカオ [泊]

第4日: ポン²²⁾グ川をわたってウドン県へ入る→ノン²³⁾グタナー→コークパク²⁴⁾ン²⁵⁾グ着

コークパク²⁶⁾ン²⁷⁾グ村には、すでにドンデーン村よりの移入者がいた。後述するチャン氏が、チャンディーたちより4、5年早く訪れていたように、この村は、当時、ハーナーディーでドンデーン村を離れた人々にとって当面の目的地とされた開拓村だったことがうかがえる。チャンディー兄弟のうち、カイ(兄)、カイ(弟)とファットの3人はコークパク²⁸⁾ン²⁹⁾グ村で6、7年間すごす。チャンディー氏ほか3人は9、10年をすごすが、彼らはいずれもこの村に在住した間、年に何度もドンデーン村へ帰っている。知人や友人に会うためである。

コークパク³⁰⁾ン³¹⁾グ村でも米の収量は不足気味であった。カイ(兄)氏(1918年生まれ)はここへ移った翌年に結婚し、妻の両親がもつ水田15ライを義兄弟とともに共同耕作した。しかし、義兄弟の人数も7人と多く、水田は分与(ベ³²⁾ン³³⁾グハイ)されなかった。そのようなところへ「北モー村によい耕地がある」という情報がもたらされた。ハーナーディーでドンク³⁴⁾リエット村へきていたレー氏(ドンデーン村出身。チャンディー氏らのイトコにあたる)がコークパク³⁵⁾ン³⁶⁾グ村のチャンディー兄弟を訪れた時のことである。そして、まずカイ(兄)夫婦とふたりの子供、カイ(弟)

夫婦、それにファット夫婦の3世帯が3台の牛車を駆って、次の地点を経由して北モー村へむかった。

第1日：ノンムアング村〔泊〕

第2日：ドンポー村〔泊〕

第3日：ノンブロンチェンゲ村（シーブンルアング郡）〔泊〕

そして4日目に北モー村に到着する（推定1949-1950年）。カイ（兄）氏の経緯をたどろう。

「北モー村の周囲はほとんど森林であったが、15軒のルーイ県出身者の家屋がすでにあった。⁶⁾ 先住者たちがここへきたのは4年前ということだった」。

カイ（兄）氏は、コークパクンゲ村をでたときには600バーツの所持金をもつばかりであった。北モー村へ移った初年度、彼は土地を買わず、先住者であるルーイ県出身者ミー氏の水田（ドンクリエット村近くにあった）を耕作（ラップチャーング）することで米を得た。300ブンゲの収穫は、水田所有者のミー氏に140ブンゲ、自らに160ブンゲの割合で分配された。

翌年、先住者のひとりから1,000バーツで約20ライの土地を購入する。内訳は水田1ライ、森林19ライである。この年の収量は70ブンゲであった。足らなかったのも、当時のヨート村長が所有する水田を1ライにつき15バーツで耕作し、村内で飯米を購入した。当時の相場は10ブンゲあたり3バーツである。

3年目には田圃を6ライに拡張し、250ブンゲ以上の収穫があった。さらに4年目は10ライほどに広げて500ブンゲ以上の収量を得ている。そして、6年目にルーイ県出身者のヌー氏より新たに20ライの水田を10,000バーツで購入した。7年目、カイ（兄）氏はドンデーン村へ戻ったときにケナフとトウガラシ

の種を得て、北モー村にもち帰り栽培をはじめた。ケナフは1ライほど植えたところ約1,000キログラムとれ、シーブンルアングの市場で売り、250バーツを得たという。当時の売値はキログラムあたり25サタンである。また、トウガラシでも100バーツ以上の収入があった。さらに、サトウキビをも栽培しはじめたのは翌9年目で、サトウ汁をとり、厚み3センチくらいの筒状の固形にしたものを1個1バーツで売っている。最初に600個つくり、シーブンルアングで完売した。近年（1974年）に至り、やはり先住者であるウアン氏から畑30ライを10,000バーツで購入する。そして昨年（1984年）、カイ（兄）氏はサトウキビ栽培をやめてキャサバにきりかえ、今日に至っている。

長男のチャンディー氏は弟たちに遅れること約3年、すなわちコークパクンゲ村で9年余りをすごしたのち、北モー村へ入っている（推定1953年ごろ）。

「自分（チャンディー）がやってきたとき、北モー村は約40戸ほどの小村で、ルーイ県出身者が多く、言葉がわかりにくかったのを覚えている。弟をはじめとするドンデーン村、ノンヤープレーク村、ナンボンゲなどコンケン県からの人々のほか、ローイエット、マハーサラカム県よりの人々が徐々に住みはじめていたところだった。彼らはルーイ県出身の先住者たちと区別して、自ら『南側からきたタイ人』（タイ・タイ）とよんでいた」。

チャンディー氏は、まず1年目にヤングロー村出身のブンシー氏から50-60ライの森林を3,000バーツで購入する。そこにつくった田圃（ナーコーク）で陸稲を収穫した。

「森には象がいた。そこは悪霊（ピー）やマラリアに満ちたところだった。先にきていた弟たち、とくにカイ（兄）、カイ（弟）の2世帯と共同し、初年度は120ブンゲの

6) カイ（兄）氏の述べる当時の戸数は、ヨート氏の口述と一致する。

全収穫を40ブンゲずつ3等分した。『ヘットナムカン・キンナムカン』（共働・共食）だった。2, 3年目になると陸稲で700ブンゲほど収穫できるようになった」。

陸稲は旱魃に弱かったという。水田を手に入れたがっていたチャンディー氏は、1970年代の中ごろになってようやく念願の水田30ライを14,000バーツで購入する。そして、1977年に「ノーソーサム」⁷⁾を他の人々に先んじてとりつけたという。現在は自らの屋敷地内にウルチ米用とモチ米用のふたつの米倉をもち、年間平均1,100-1,200ブンゲの収量を得ている。必要に応じて、モチ米は1ブンゲあたり21-22バーツ、ウルチ米は1ブンゲあたり31-32バーツで、村内やシーブンルアングで売ることもある。農繁期には、村内に住むふたりの息子に手伝わせて年間70-80ブンゲの米を与えている。

チャンディー兄弟たちは、若干の時間の差はあるにせよ、全員がドンデーン村をでてコークパクンゲ村で止住したのちに北モー村へ移住している。だが、今日も北モー村にとどまっているのは、チャンディー氏、カイ（兄）氏、カイ（弟）氏の3兄弟のみである。カイ（兄）氏とともに先陣をきって移住した妹ファットは、北モー村に入ってもまもなくドンクリエット村によい条件の土地をみつけたので、その後北モー村をあとにしている。さらに、後発隊としてチャンディー氏とともにやってきたサーリ氏とトンゲミー氏は、初年度の収穫が陸稲で200-300ブンゲはあったが、さらにハーナーディーでファイヒン村（北モー村から北西5キロメートルの村）へ移り今日に至っている。北モー村を離れたといってもいずれも近隣村で、互いの連絡は容易な距離にある。現在、兄弟たちがドンデーン村へ戻ることはほとんどない。カイ（弟）氏はい

7) 土地が利用済みであることを確認する公的証書。

う。

「かつては、友人や知^{シアオ}人^{コンサニット}がドンデーン村にいたので、少なくとも年に1度は帰ったものだが、皆でてしまい、誰もいなくなったので、ドンデーン村をなつかしく思うことはないよ」。

（チャン・ケオデーンゲ氏の北モー村への移住経過）

チャン・ケオデーンゲ氏（1918年生まれ）は、先のチャンディー氏よりさらに遅れて1957年にハーナーディーで北モー村へ移住した。だが、チャン氏が両親、兄弟とともにドンデーン村を離れたのは1938年のことであり、チャンディー兄弟たちより一足早くコークパクンゲ村に移住している。そして、ここに19年間滞在した。

「ドンデーン村にいたとき、両親は20ライの水田をもっており、年に300-400ブンゲの収穫があった。しかし、悪い水田で飯米は不足がちだった。村をでるときに両親は水田、家屋、何頭かの水牛と牛を売ってから牛車を購入した。……コークパクンゲ村へゆくことは決っていた。同村出身者（コンルオムバーンカン）のイン氏が連絡をとっていたからだ。わしらは兄弟7人、両親ふたりの計9人、さらにドンデーン村の知人だったノイ氏とその妻で、牛車5台のグループだった。ほかに（チャン氏自身の）母方の親族（クルア・ヤート）が7, 8人コークパクンゲ村まで同行し、見送ったあとでドンデーン村へ帰った」。

その行程は3日であった。1泊目はドンポー村（コンケン県ムアング郡）、2泊目はタナー村（ウドン県ムアング郡）ですごし、3日目にコークパクンゲ村に到着したという。

到着後、両親は30ライの土地（ナーパー）を買い、500ブンゲ（初年度）から800ブンゲ（3, 4年目）の安定した米の収量があった。

9年目の1946年に、チャン氏は、同村にハーナーディーで移住していたウボン県ファヤート郡出身の娘と結婚する。同年、オークヒエン⁸⁾ してからも妻の両親の田圃を耕作し、年間300ブンゲ以上を得ていた。⁹⁾ だが、以後10年の間に子供が5人（男3、女2）が生まれ、飯米が不足気味となり、他所によい水田をみつける必要が生じたという。

「コークパクンゲ村をでて先に北モー村へいっていたカイ（兄）たちが『誘い人』（コンサクチュオンゲ）で、北モー村へゆくことをすすめてくれた。そこで1957年、わしの家族7人は、ドンハン村からハーナーディーにきていたミー・リッターじいさんとパーバあさんの家族7人の計14人で、牛車7台（うち5台はチャン氏のもの）で移動した。コークパクンゲ村をでるとき、水牛と牛以外はすべて売り、約7,000バーツの金をつくった」。

北モー村にはチャン氏の姉（ノイ）が先行しており、¹⁰⁾ 30ライほどの土地をもっていた。姉は、牛車1台と牛2頭でその土地を先住者から入手し、約10ライを水田にしていた。チャン氏は北モー村に入ってからしばらくの間、カイ（兄）氏の家（無料で）とどまるが、結局、ドンクリエット村近くにあったその姉の土地すべてを7,000バーツで購入する。

「1年目は170ブンゲの米がとれたが、¹¹⁾ とても足らなかった。わしは他人の水田を耕作しないで、魚4尾と米1カゴ（約2キログラム）を村内で交換するなどして米を得た。ほかにはキログラムあたり3バーツだ

ったケナフを植え、100キロはとった。自給用にウリ、赤タマネギ、タバコやトウガラシなどもつくった」。

2年目、チャン氏は水田を約15ライに拡大して300ブンゲ以上を得る。6年目を迎えるころには水田は22ライほどになり、収量も600-700ブンゲに増加した。12年目にはほぼ現在の規模になり、通常800-1,200ブンゲの収量がある。ちなみに1983年は1,100ブンゲがとれ、雨が不足がちだった1984年は700ブンゲであった。収量が増加すると同時に、チャン氏はさらに5人の子供をもうけている。

まだドンデーン村に親類や知人をもつチャン氏は、2年に1度はカチナ衣奉獻祭（ブン・カチン）や供養飯儀礼（ブン・チュークカオ）の際にドンデーン村に戻るといふ。しかし、彼自身の兄弟は、以下に示すように、全員がコークパクンゲ村を経てのちにさらにハーナーディーで他村へ移住している。

- 1 ブン（長姉）：ドンデーン村→コークパクンゲ村〔住〕→ノンゲカム村（チュムペー郡）に移住後死亡
- 2 ルン（長兄）：ドンデーン村→コークパクンゲ村〔住〕→クットディンチー村（ウドン県ナークランゲ郡）に在住
- 3 ロート（次姉）：ドンデーン村→コークパクンゲ村〔住〕→クットディンチー村に移住後死亡
- 4 ノイ（三姉）：ドンデーン村→コークパクンゲ村〔住〕→北モー村〔住〕→コークパクンゲ村に在住
- 5 チャン氏（インフォーマント）：省略
- 6 ワン（妹）：ドンデーン村→コークパクンゲ村に在住
- 7 パン（弟）：ドンデーン村→コークパクンゲ村に移住後死亡

II-4 ハーナーディーの移住者たち（2）

ハーナーディーによる「新天地」での暮ら

8) 妻方の親と同居後、独立の家屋に住むこと。

9) 植えていた品種の呼称は、カオ・イセー（カオ・ニャイと同品種）、カオ・カオ、カオ・チャオクンゲである。

10) 姉は、ドンデーン村→コークパクンゲ村→北モー村を経たのち、再びコークパクンゲ村へ戻って住んでいる。

11) 品種の呼称は、カオ・ドークチャン、カオ・ニャイ、カオ・克蘭ゲである。

しむきは、開拓者としてどのようなかたちで耕地をものにするかで大きく左右される。北モー村開村初期のころに着目すれば、当事者の境遇と能力が、可能性に満ちた生活の確立にとって、いかに大きな要因であったかが明確である。ドンデーン村出身者ではないが、以下に述べる移住者の今日に至る経緯はこのことを示す端的な例である。すなわち、現在の北モー村の有力者とされているエート・セクスワン氏とティン・ソムバディ氏の場合である。

エート氏は先にもふれたように、ドンデーン村出身者からみれば北モー村の先住者になるが、彼自身もハーナーディーの過程で北モー村に移住した立場にある。そして、のちに村長をつとめた経験のもち主である。一方のティン氏は、前述のチャンディー氏とほぼ時期を同じくして北モー村入りしたコンケン県出身者である。現在の北モー村の宗教的リーダーでもあるが、まさに北モー村で多数派となったハーナーディーの移入者たちによって選ばれ、支えられている人物である。

（エート・セクスワン氏の移住経過）

エート氏の両親は、チャイヤプム県チャットラート郡のファサート村に20ライの水田をもっていた。平年で150ブングほど、豊作年では200ブングほどの米が収穫できたが、「砂状の土壌で質がよくなく、ひんぱんに旱魃にみまわれた」水田であった。エート氏が13歳の年(1939年)、両親は同村内の8世帯とともにウドン県のドンクリエット村へハーナーディーにでた。この村へは、父親の兄弟が先にチャップチョングしにいており、連絡されたためである。両親は、エート氏を含む子供8人全員で離村した。そのときに水田を400-500バーツでファサート村の知人に売却している。

9世帯がドンクリエット村に入ってしまったら

くして、ファサート村方面に雨が降ったという知らせが届いた。この知らせで、一緒にやってきた8世帯は全員チャイヤプム県の方へひき返したが、エート氏の家族は残り、兄弟とともにチャップチョングしはじめた。約50ライの森林部を確保したが、すぐには耕作できなかった。初年度とその翌年は、当時ドンクリエット村の住民だったケンター氏(ルーイ県ワンサプン郡出身)の水田を、ひとりあたり年間100ブングの粃米という条件で耕作した。兄弟ひとりずつがそれぞれに行なった。

3,4年目には自分たちの土地で15ライほどの水田耕作ができるようになり、約200ブングが収穫できた。7年目(1946年)、20歳になったエート氏は、ヤングロー村出身の娘ソムシーと結婚するためにノイ村(旧北モー村。1942年開村)へ婚入する。エート氏の両親は、以後もドンクリエット村に住んだ。妻の両親が自らチャップチョングして拓いた水田60ライはよい水田で、年間1,000ブングの収量があった。結婚の翌年に第1子をもうける。この年、屋敷地を現在の北モー村に移し、妻の両親とともに全員が住んだ。エート氏は以後7人の子供をもうけ、妻の両親の老後を世話した。現在は、同居していたその両親も亡くなり、よい水田はすべて彼が管理している。

エート氏は北モー村に移住して約12年後、はじめてチャイヤプム県の出生村へ様子うかがいによっている。「誰も知人がおらず、『どこからきたのか』と尋ねられた」。彼が生まれ故郷へ戻ったのは、あとにも先にもこの1回のみである。

（ティン・ソムバディ氏の移住経過）

1915年にナンボン郡のブアヤイ区で生まれたティン氏は、同区内にあるタードゥア村で現在の妻と結婚、6人の子供(うち、ふたりは死亡)をもうけた。10ライの水田をもち、年間約400ブングの米を自給用として得てい

たが、洪水がひんぱんにあり、よい水田が欲しかったという。タードゥア村出身の義姉の息子が北モー村にハーナーディーででていた（1950年）ので、ティン氏はまずひとりで水田をみるために北モー村を訪れた。そして、帰村後すぐに、いくばくかの畑と10ライの水田をタードゥア村の知人に計1,500バーツで売り、子供4人と妻とともに再び北モー村をめざした。1952年のことである。

「まず、到着したその日から、当時のヨート村長の家の裏側にあったスックという人の家と屋敷地を、180バーツで買って住んだ。2年早くきていた義姉の息子から森林20ライを500バーツで手に入れたが、最初の2年間はこれを水田にするのにかかり、米をつくらなかった。だから、ヨート村長が決めた条件（年間100ブングの粳米）で彼の水田を早朝から暗くなるまで耕作したよ。家族全員が十分に食べるのに200ブングは欲しかったんだが……」。

ティン氏自身の水田は3年目を迎えて耕作可能となる。森林20ライは5、6ライの森林と14、5ライの水田にかえられた。そして、この年は150ブングの収穫があった。¹²⁾

「当時、ハーナーディーで北モー村に移住した多くの人々は、先住者が確保していたいくらかの水田を買って、移住したその年から耕作したものだが、自分はそれほどの金銭的余裕がなかった」。

翌4年目（1955年）には、同じ水田面積で、前年の倍である300ブングの収量があった。しかし、収穫後ティン氏は、水田を含めた計20ライのすべての土地を6,300バーツで売却する。相手は、コンケン県ノンゲルア郡のメング村から、ハーナーディーで北モー村にやってきた人である。そして、ティン氏はすぐに平坦部の森林100ライ（うち10ライが水田

化されていた）を3,400バーツで手に入れた。

「この土地は村の『公共地』（ティーディン・サータラナ）だった。だから、わしがだした費用は、この年（1955年）に着工されたばかりの寺院に、僧房（クティ）や講堂（サーラー）をつくる経費にあてられた」。

新しい土地を耕作した翌年、200ブングの米がとれた。翌年、その次の年と、ティン氏は水田面積を徐々に拡大し、300ブング、400ブングの収量を得るようになる。

400ブングの米がとれたその年、水田は15ライ程度であった。そして、同年の収穫後、ハーナーディーで北モー村にやってきたばかりのコンケン県からの移住者に、そのすべての土地を15,000バーツで売りわたし、ティン氏は8,000バーツで現在の42ライの土地（内訳は水田20ライ、森林22ライ）を手に入れた。1957年のことである。翌年には、この水田から600ブングの米が収穫された。以後、ティン氏は土地の売買はせずに今日に至っている。北モー村に移住後、さらに6人の子供をもうけたので、ティン氏の家族は12人になっている。

「土地を売買する額は、知人、親族ほど安く、見知らぬ者に対しては高くなる」とティン氏はいう。同じハーナーディーでやってきた彼の仲間たちは、よりよい条件の水田を入手するティン氏の土地ころがしの過程と今日の財をなした手腕を評して、「ティンは『農民博士』（チャオナー・エーク）だよ」といってはばからない。この一見、世俗的な現実家は、同時に北モー村の寺院設立以来の信仰熱心な篤信家（ターヨック）であり、自他ともに「法を守護する者」（プーラクサータマ）を認めている。また、北モー村には「村祠」（ラックバーン）があり、四斎日（ワンプラ）ごとにここへ献花・献灯するのも彼の大切な役割のひとつである。

12) 品種の呼称は、カオ・カムバイ、カオ・パン（カオ・ドークチャンと同品種）である。

II-5 「村の守護霊」信仰をめぐる先住者と移住者

先住者との土地の売買関係が成立して「よそ者」のハーナーディーによる移住は可能となる。たえず移住者の出入りがあるために同質性を欠く村の常態からすれば、両者の間には定住者と侵入者というかたちであられるほどの尖鋭な緊張関係は生じないのがふつうであろう。北モー村の場合、ふたつの異なる言語集団ということから、互いがチュアサーイ・ルーイとタイ・タイという分類をもって、先住者、移住者を明確に区別する傾向が長くつづいている。しかし、これまで両者が対立する事件はなかったといわれている。

「(先住者の)ルーイ県からの人々は、われわれ『南側からのタイ人』に耕地を売って皆チュムペー方面へでていった」という移住者は少なくない。ルーイ県からの人々は売るために土地を占有・確保していたのだともいわれる。いずれにせよ、現在の北モー村では先住者たちは、すでにいなくなってしまった人々として語られる傾向が強い。今日、北モー村の住民はすべてがハーナーディーでやってきた「南側からのタイ人」であるという勢いである。

だが、実際には4世帯ほどの先住者グループが現在も在住するほか、自らをチュアサーイ・ルーイの系譜に位置づける人々も少なくない。このことは、ふたつのグループが互いにほとんど干渉せず、それぞれの生活領域を守りながら共存してきたことを思わせる。北モー村という一行政村のなかには、さらに分離できる社会的世界が展開しているといえはよいだろうか。それは、かつての「村の守護霊」(ピー・プーター)信仰をめぐる両者が多少異なった姿勢をもつことにもうかがわれる。ハーナーディーによる移住者にとって、先住者がすでに制度化していた「村の守護霊」の儀礼は、「(供物用の)酒やニワトリ代が高

くつく」不合理なものであり、「村の守護霊」自体、病や災禍の元凶だったという。一方の先住者にとって、それは「村の規律、生活の規律」としての意味をもっていた。

北モー村初代村長をつとめたヨート氏(前述)も、チュアサーイ・ルーイを自認する人である。現在、下半身を失ったヨート氏は、家族の者以外に、常に5、6人のチュアサーイ・ルーイを自認する人々にかこまれて日々を送る。彼によれば、チャップチョングにともなう北モー村の成立と「村の守護霊」祠(ホー・プーター)の設立とは不可分のものである。

「恐しい悪霊がいる森を皆で分割し合う。互いに口約束でおおまかな広さに分けて、めだった大木に×印をつけてゆく。境界はもうけなかった。一定の範囲内の木々を伐採して森をきり拓いてゆく。木をきりだしてから火をつけて焼くんだが、木をきりだすと同時に、家屋づくりと『村の守護霊』祠づくりにかかる。これらをすませてから開田しはじめた。田圃の境界は、雨が流れ落ちるような高みになるところじゃよ」。

ヨート氏を中心とする開村者たちは「沼」(レンナム)のそばに水田をつくって水稻(カオ・ナー)を植えた。のちのハーナーディーの移住者がするような陸稲(カオ・ハイ)を植えることはなかった。水稻以外には、トウガラシ、トウモロコシ、ウリなどを栽培したという。

開村者たちは「村の守護霊」を崇めた。村内からくじで選出した儀礼執行者(チャム)をリーダーに、年2回の儀礼をとり行なった。陰暦2月には豚4頭とニワトリ4羽を、陰暦6月には豚6頭とニワトリ6羽を、それぞれ(水曜もしくは木曜日に)祠に献上した。四斎日には、①精米しない、②耕作しない、③水牛・牛を使わない、④炭をつくらない、⑤生類を殺さない——などの規律を守り、仕事

を休む日としていた。

「それらは村の『法律』（コットマーイ）のようなものだった。もし、犯す者がでると村の連中はすぐにチャムに知らせ、その人物を『村の守護霊』祠へつれてゆく。そして許しを乞う。そのときには酒とアヒルあるいはニワトリ1羽、米、そしてローソクのかわりになる『コヨリ』（ティエンカム）を用意する。彼が持参しなければ、チャムが用意して整え、許しを乞うたものだ」。

「村の守護霊」への儀礼は1971年にとりやめられる。「村の守護霊」を追放（カップライ）したためである。ヨート氏が回想する。

「ハーナーディーで他村からやってきた人々は（上記の）われわれの『きまり』（ウィナイ）を知ってはいたが、守らなかった。『きまり』に無関心で仕事をする者が多くふえてゆくにつれ、そのために悪霊の犠牲になる者がではじめた。（やがて）『きまり』を犯した当事者だけではなく、他の人々まで『村の守護霊』の怒りの災いを被るようになった。さらに、そのつど『村の守護霊』に許しを乞うことも困難になってきたので、人々は集会をもち、僧侶に相談することになった。結局、『村の守護霊』をおいだして今日の『村祠』を設立した」。

この「追放劇」にたち会い、全体的なアレンジを行なったのは、前述した移住者のひとりであるティン氏である。ティン氏は次のように述懐する。

「病やいろんな災難にあった人々がでた。原因は『村の守護霊』にあるといわれていたので、僧侶でありモータム（悪霊払い師）でもあったプラ・ブンマー師（ウドン県ノンサンゲ郡のファイクラチャイ村に止住していた）のところへわしが赴き、きてもらうようにとりはからった。そして『村の守護霊』にうかがいをたててもらった。師は花とローソク各5対（カンハー）を用

意して問うた（以下、師＝僧侶；守＝『村の守護霊』）。

師：『（守護霊に対して）ここにもう何年いるのか』

守：『100年になる』

師：『すかせた腹をいつもどこで満たすのか』

守：『いつもさがしている』

師：『新しく生まれかわりたいか』

守：『生まれかわりたい』

師：『なれば、（仏教の）戒律を遵守できるか』

守：『できない』

師：『できないのならば、なぜ生まれかわりたいのだ』

この問いに『村の守護霊』はこたえなかった。そこで師は追放を決め、儀礼（ピティ・カンバーン）をとり行なった。まず、土をもってきて一握りずつつかんで口もとへやる。呪文を込める（プーク・セーク）ためだ。そして、この土を村の境界にまき放つ。次に、村の四方（東西南北）に木柱を1本ずつ埋め込んで土をかぶせた。『村祠』をつくったのはそのあとだ」。

新しくたてられた「村祠」は、ラックバーン、アハックバーンなどとよばれているが、人によってはラック・ウパクット¹³⁾ともよぶように、そこには精霊ではなく仏教的な守護神が祀られているとされる。移住者の人々は、「われわれは、『精霊』ではなく『法』（タンマ)¹⁴⁾によって守護されている」という。開村以来の地域的守護霊は、より抽象的で一般的な仏教の守護力にとってかわられた。¹⁵⁾

13) ウパクットは呪力をもつ僧侶と考えられている。

14) 文字どおりのダルマというよりは、聖なる力として言及される。これは東北タイ農村では一般的である。

15) このような「村の守護霊」の悪霊化→追放→仏教的守護力の導入の過程は、同じ開拓村であるドンデーン村にもみられる[林 1984：77-98]。

この「信仰改革」では、先住者との間にはまったくコンフリクトは生じなかったようである。当時すでに、ルーイ県からの出身者たちが北モー村では少数派にすぎなかったことも一因であろう。だが、現在も同村に住む最先住者であるヨート氏たちという。

「儀礼はしなくなったが、われわれ（チュアサーイ・ルーイを自認する者）は『村の守護霊』を祀っていたころの『きまり』を守りつづけている。このことは、ハーナーディーで移住した人々には強制するべきものではない。当人次第のことだから」。

開村当初から北モー村に住む人々からすれば、当時の生活規範は今日も規範でありつづける。ハーナーディーによる他村移入者があって約20年を経て、それは公の領域から私的な領域へと退いたのだが、その変化は、新しく北モー村を担う世代が成長する時間のうちにゆるやかに進行したとみるべきだろう。地域的信仰の差異は、国教としての仏教の枠内で解消されているのが北モー村の宗教生活の実状である。

III ハーナーディーをめぐる若干の考察

われわれがインタビューできたハーナーディーによるドンデーン村出身の移住者は、彼らより1世代以前の常態だったと推察されるチャップチョンゲではなく、すでに先住者がチャップチョンゲした土地の購入を通じて田圃を開拓し、自らの生活を築いている。それは北モー村に移住した者だけに限られることではない。

ウドン県ナークラング郡クットディンチー区ノンサノー村へ移住したケオ・ケオデーング姉妹とその両親たちの場合も、同様である。彼女の両親には5人の子供があった。ドンデーン村では年間200ブンゲの米がとれたが、十分ではなく、1955年にハーナーディーにて

た。家族全員が他の村人とともに牛車10台以上の大部隊でドンデーン村を北上した。北モー村を通過してノンサノー村まで11日を要したという。やはり、当地にはすでにチャップチョンゲした有力者がいた。両親は100ライの森林を8,000バーツで購入したほか、空家だった現在の家と屋敷地を60バーツで得た。田圃を拓き、5,6年後には300ブンゲ以上の収穫があり余裕がもてるようになったという。

一般に、年代が現在に近づくほどに入手する土地の購入費も高くなる。北モー村へ1973年ごろに移住したター・シーハヤック氏は、水田40ライを含む100ライの土地をドンクリエット村に住む所有者から29,000バーツで購入している。北モー村開村まもないころにやってきたター氏のイトコが27ライの水田を含む30ライの土地を300バーツで得たことをター氏はよく比較するのである。現在もドンデーン村に住むプアング・チャムナン氏が1981年に買った北モー村の水田32ライは、54,000バーツであった。耕作は北モー村に住むプアング氏の知人が行うが、農繁期になるとコンケン県での勤務先（東北地域農業センター）を休んで、子供や妻とともにドンデーン村からやってきている。

ハーナーディーは、いくつかの開拓村を中継するようなかたちで展開する。兄弟がいくつかの場所に分かれて止住し、連絡をとり合って、よりよい条件の地にさらに移動することは珍しいことではない。移住は必ずしも単線的な一方通行の行動ではない。むしろ、出生村と第1、第2の移住先との間をゆきつ戻りつ進行してゆくのがふつうである。すなわち、移住者にとっての開拓村は、当初からの定住地では必ずしもなく、中継地としての性格をもつ場合が多い。

すでにみたコークパクング村は、1940年代には、北モー村に止住することがなかった移住者にとっても、開拓村であると同時に、あ

たかも同郷者の「開拓中継村」のような役割を果たしていたようである。現在、コンケン県チュムペー郡のバーンパイクトヒン村に住むファット・マイカミ氏は、1940年にハーナーディーで父親に率いられてドンデーン村を離れ、コークパクンゲ村に移住した。父親はここを拠点にコンケン県チュムペー郡のノンゲワー村へ1カ月、さらに同郡内のノンゲトン村へ赴いて24ライの土地を260バーツで買いつけた。そして、次女の夫が先にここへ単独で入村し開墾する。そののち、次女をはじめとするファット氏の兄弟がコークパクンゲ村を離れてノンゲトン村へ移住した（1946年）。同年にコークパクンゲ村で妻を失ったファット氏自身は、行動をともにせず、再婚で現在の村に婚入するのである。

インフォーマントが述べる移住理由は、田圃が洪水・旱魃の被害をうけやすかったり土壌が劣悪であったりすることに加え、その相続状況や扶養家族の成員の相対的多数によって飯米が確保しにくいというものである。ハーナーディーは第1に、当事者が耕作する田圃の自然的・社会的条件が、そのとき、あるいは将来に備えての飯米確保に不安をもたらしているために、他村の田圃を検分したうえで移住することである。

だからといって、ハーナーディーは、必ずしも離村を余儀なくされた貧民（コン・ヤークチョン）がとる社会的行動とはみなされていない。むしろ、より収量のよい耕地を得て暮らしむきを向上させる契機をもつ、積極的な行動として捉えられる傾向がある。このような行動は、先代からの移動・止住のパターンの延長線上にあるものである。出生村にとどまることそれ自体に、さほど積極的な意義が認められていないことが背景となっている。

基本的に、ハーナーディーによる移住行動には、いくらかの物見遊山（パイ・ティオ、ไปเที่ยว）と、それにともなう情報が先行す

る。そして、自身による耕地の下見・検分行動がつづく。次いで、当地の先住者（チャップチョンゲをした者）との買いつけ約束がすすんでのちに、家族・きょうだい全員の移住が行われる。それは、決してあてどなくさまよう冒険的探索ではなく、きわめて計画的である。しかも、人々によって収集・交換される複数の情報が実際の行動に先行する点で、広範な社会的行動である。

ハーナーディーにみられる人々の移動性は、移住をとまなわなくても村人の生活の端々にうかがえる要素である。今日もドンデーン村に住む者もたえず村外へでていたといっても過言ではない。まず第1に、不安定な稲作の自然条件がもたらす、そのつどの飯米確保のために、人々は行動した。曜日ごとに行程の安全を願う儀礼行動があったことは、旧来から村内の人の動きが激しかったことを示している。ある古老（1911年生まれ）は、約50年前のドンデーン村の一光景を次のように回想する。

「昔も今と同じように洪水と旱魃はあった。そんなときには夫婦や兄弟ぐるみで牛車で粃米を求めて約15日かけてウドン方面へむかったものだ。そして米を得たらすぐに戻ってきた。人々は、それぞれにさがしまわる人から、どこへゆくべきか聞く。米がなくなったら、またゆく。同じ年に何度もいった。洪水があれば、今のように外へ仕事をみつけて金をもうけ、それで米を買うんじゃなくて、米をさがしたんだ。そのような遠出の出発のとき、安全を祈って縁起をかついだよ。日曜は顔をきれいに洗う。月曜はまず横になってからでる。火・水曜は甘いもの（菓子）をひと口食べてから、木曜なら顔に白粉を塗って、金曜には少し村のなかを散歩してから牛車に乗る。土曜には身内で少し痴話げんかしてから牛車を寺院の方へむけてでるんじゃよ」¹⁶⁾

さらに、飯米を求める行動に加えて、タイラオ族の男性にはさまざまなかたちでの一時離村的な行動が顕著である。よく知られる出稼ぎに限らず、「嫁さがし」(レン・サオ)や各地に散住する親族・知人間の「相互訪問」(マーヤム・パイヤム)、さらには得度後にそうしたネットワークを通じて各地の寺院に止住する僧侶の巡歴行動などがある。その行動範囲は近郊から遠方の県とさまざまであり、そのまま訪問先に住むことも珍しくない。それらはいずれも「どこかへ旅する」(パイ・ティオ)という日常語で表現される、いくらかの無目的な行動の延長にある。

離れた村に戻ることもあれば、そのまま嫁や職を得て他所に生活をもってしまうこの行動は、社会移動(social mobility)のひとつのチャンネルをなす面ももっている[Kirsch 1966: 370-378]。同時に、この行動の社会的結果として、出身村と到着地間を往来できるルートが生まれ、村外の情報を人々にもたらし回路が形成されることになる。すなわち、それは複数の村落を往来するような生活の移動形態を可能にする背景となる。

ハーナーディーは、基本的にはそのようなパイ・ティオ行動のルートに立脚していると考えられる。しかも、単なる旅ではなく、より具体的な目的をもった離村行動としてあらわれる。すなわち、それは離村と定着の連続的な過程のなかで進行する、ひとつの基本的な生活の構築・維持様式とみることができる。定住することはそのような生活様式の一局面としてあらわれる。ハーナーディーで移住し

たインフォーマントもその両親も、同じく移動の途にある人生であった。米の収量が安定しない「限界地」に自らの生活基盤をおく人々にとって、ハーナーディーとはよりよい収穫の手段としての耕地をゆきつ戻りつさがし求める(ティオ・ハー)伝統的な生活行動を意味していると思われる。

すでにみたように、移住者たちの故郷意識は、場所としての村にあるよりは、きょうだい、親族、知人を主とする親密な人間関係にある。そして、ある者が移動することによって他の者もまた連鎖的に移動のチャンスを得る。そのような社会関係の流れのなかで生活が把握されるがゆえに、耕地としての田圃は、所有されるべきものというよりは、水牛や牛と同様に使用されるべき生活上の道具であったと解すべきであろう。¹⁷⁾

しかし、いずれにせよ、移住をとまなうハーナーディーは、その実行において勇気と決断を要する行動である。移住先で、必ずしもより豊かな生活が保証されるわけではない。われわれがインタビューした移住者たちは、それぞれの過程を経ながらも、ある意味ではこの伝統的な生活行動様式の典型的な成功者といえるだろう。

参 考 文 献

- 林 行夫. 1984. 「モータムと『呪術的仏教』: 東北タイ・ドンデーン村におけるクン・プラタム信仰を中心に」『アジア経済』25(10): 77-98.
Kirsch, A. Thomas. 1966. Development and Social Mobility among the Phu Thai of Northeast Thailand. *Asian Survey* 6(7): 370-378.

16) 人々が赴いたのは、ウドン県、コンケン県チュムペー郡方面であったといわれるが、チュムペー行は行路が泥道になりやすく、牛車が通行困難であったため、ウドン行の方が好まれた。

17) 使用権の優越は人々の土地意識に根強い。本来誰にも所有されない村の公共地が、使用権をもとに村人の間で売買されるのはふつうである。